

# アジア人留学生の視点からみた温泉地の魅力と課題

## Attractiveness and Problems of Japanese Hot Spring Resorts from the point of view of Asian Students

丸岡稔典\*・長谷川泰洋\*

MARUOKA Toshinori\* and HASEGAWA Yasuhiro\*

\*名古屋産業大学現代ビジネス学部 Nagoya Sangyo University, Faculty of Current Business

**Abstract:** The purpose of this paper is to clarify the attractiveness and problems of hot spring resorts as tourism resources through case studies and questionnaire survey to Asian students.

In this survey it is revealed that 1) there are expectations to attract foreign tourists to hot spring resorts as a means of regional development, 2) some Asian students are not attracted to hot springs because they feel uncomfortable taking bath with others, and 3) there is a need for information in multiple languages for foreign tourists.

**keywords:** Inbound, Tourism Resources, Regional Development

### 1. はじめに

#### 1.1 目的

本研究の目的は、アジア人留学生の視点から温泉などの日本の観光資源の魅力と課題を明らかにし、訪日外国人観光客の誘致の参考とすることにある。

少子高齢化が進み、我が国の総人口が減少に転じることにより国内需要が減少し、我が国の経済成長が伸び悩むことが懸念されている。とりわけ都市部へ人口の流出が進む地方にとって、消費の拡大や雇用の創出を通じた地域経済の活性化は重要な課題となっている。現在、その地域経済活性化のための手段として、急速に拡大する、海外から日本を訪れる外国人観光客による消費（インバウンド消費）に注目が集まっている(内閣府, 2018)。しかし、訪日外国人観光客の滞在先は、我が国の一部にとどまっておらず、地方にとって外国人観光客の誘致は重要な課題となっている。

大森寛文(2019)は、訪日外国人への調査結果を分析し、アジア主要国の場合は「温泉入浴」、「ショッピング」、「テーマパーク」に関心があり、都市型の観光を期待しているが、欧州主要国の場合は「日本食を食べること」、「日本の歴史・伝統文化体験」、「日本の日常生活体験」に関心があり、日本らしさ

を感じられる食、伝統・文化、生活などの体験型の観光を期待していると述べている。そこで、本研究では、訪日外国人観光客の大半を占めるアジアからの訪日外国人にとって観光資源の魅力と課題を把握する。そのために身近な訪日外国人としてアジア人留学生を対象とし、アジアからの訪日外国人が関心を持つとされる温泉地に焦点あてながら、アンケート調査と現地調査、事例調査を通して、観光資源の魅力と課題を把握する。

#### 1.2 研究の構成と方法

本研究では、ネパールを中心としたアジア人留学生からみた日本の温泉などの観光資源に対する評価を分析する。そのため、日本の大学や大学院に留学しているアジア出身学生から研究協力を得た。

まず、2節では我が国の訪日外国人観光客の現状と課題を概観する。続いて、3節では、アジア人留学生に対するアンケートを通して、彼ら/彼女らの日本での観光ニーズを把握する。さらに、4節では中京圏近隣の温泉地である長野県阿智村の昼神温泉を対象にした事例調査をとおして、アジア人留学生の日本での観光ニーズを把握する。阿智村は島宗と伊藤(2017)などにより訪日観光客のニーズを満たす

可能性を指摘されている地域である。5 節では、訪日外国人観光客誘致に成功した温泉地として、徳島県三好市大歩危・祖谷温泉郷を取り上げ、現地でのインタビュー調査を通して、訪日外国人観光客の誘致のための方策を検討する。

## 2. 日本における訪日外国人観光の現状

少子高齢化の進展や余暇活動の選択肢の多様化などにより、日本国内の旅行市場が頭打ちとなっている（図 1）。こうした中、近年訪日外国人観光客への注目が集まっている。訪日外国人観光客の誘致の契機となったのが 2003 年に小泉内閣によってはじめられた「Visit Japan Campaign」である。この「Visit Japan Campaign」では 2010 年までに訪日外国人旅行者数を 1,000 万人にする目標が掲げられた。そのため、国と地方公共団体、民間団体・企業が共同で事業を進める体制が整えられた。訪日外国人観光客を増やすための取り組みとして、観海外の旅行会社やメディア関係者の招聘、海外の新聞・雑誌・テレビ等メディアを通じた PR などがおこなわれた。また、併せて 2005 年に中国全土に団体観光ビザ発給地域を拡大、開催期間中（2005 年）の韓国、台湾からの訪日者に対する「愛・地球博」開催期間に合わせた短期滞在査証免除措置と開催期間後の措置の延長などビザ要件の緩和、外国人旅行者向け消費税免税制度の拡充（2014 年より）などの措置が講じられた。

こうしたキャンペーンに加えて、東アジア、東南アジア各国の経済成長、格安航空会社（LCC）国際線の就航などにより、2003 年以降、訪日外国人数は飛躍的に増加し、2003 年には 520 万人程度であったのが、2019 年には 3,120 万人程度と約 6 倍となっている（図 2）。その内訳をみると、中国、台湾、韓国、香港の東アジアの国・地域で 70% を占めており、その他の東アジアの地域を加えると、アジア地域全体で 8 割以上となっている（図 3）。

2019 年の訪日外国人の旅行消費額は 4 兆 8,135 億円となっており、一人当たりの旅行支出額に換算すると 158,531 円となる（観光庁、2020、訪日外国人消費動向調査）。他方で、2019 年の日本人の国内旅行消費総額は 21 兆 9,312 億円となっており、1 人 1 回当たりの旅行支出額に換算すると、37,355 円（国内宿泊旅行に限定すると、55,054 円）となっている（観光庁、2020、旅行・観光消費動向調査）。したがって、日本国内の旅行消費額でみると、訪日外国人消費は日本人消費の 1/5 相当の額となっており、

大きなウェイトを占めていることがわかる。また、一人当たりの旅行支出額では、日本人の 3 倍程度の額となっており、外国人観光客誘致が地域経済に大きな影響を与えることが予測される。

続いて旅行手配の手段についてみると、個別手配の割合が高く、年々その割合が増えている。訪日外国人旅行では、FIT（Free Individual Traveler 個人観光客）が中心となっていることが分かる。

観光庁による訪日外国人消費動向調査の「2019 年年次報告書」によると、訪日外国人が訪日前に期待していたこと（複数回答）として 26.7% が温泉入浴をあげ、最も期待していたこと（単一回答）として 6.9% が温泉入浴をあげている。また、今回の日本滞在中にしたこと（複数回答）として 32% が温泉入浴をあげ、次回したいこと（複数回答）として 49.2% が温泉入浴をあげている。これらの結果から、温泉入浴は訪日外国人にとっての観光の選択肢となっていることがうかがえる。

他方で、外国人観光客が多数観光地を訪問することにより、オーバーツーリズム問題が生成している。オーバーツーリズム問題とは観光地に、その地域のキャパシティを超えた過剰な観光客が押し寄せることにより引き起こされる地域住民の環境の悪化である。具体的には、観光客のマナー違反やごみ問題、宿泊施設の不足、交通渋滞などが挙げられる。例えば、観光客が集中する京都では、混雑により景観が損なわれ、住民の生活環境が悪化することを防ぐために、「オーバーツーリズム対策事業」（京都市観光協会 <https://www.kyokanko.or.jp/project/sustainable/>）がおこなわれている。したがって、単に訪日観光客を誘致するだけでなく、地域住民の生活環境の維持との調和を図ることが求められる。

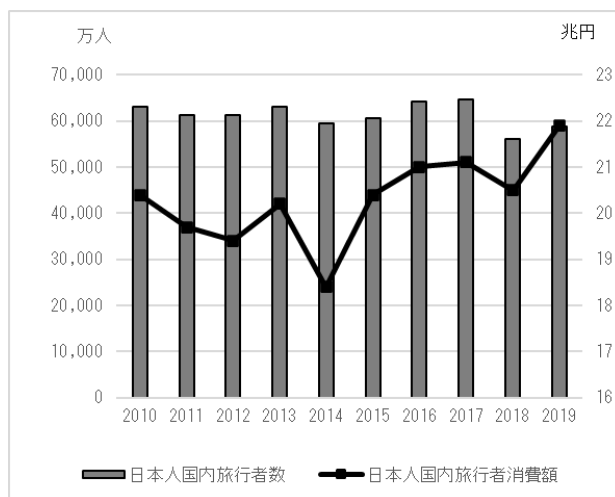


図 1 日本人国内旅行者の動向 宿泊旅行統計調査より作成

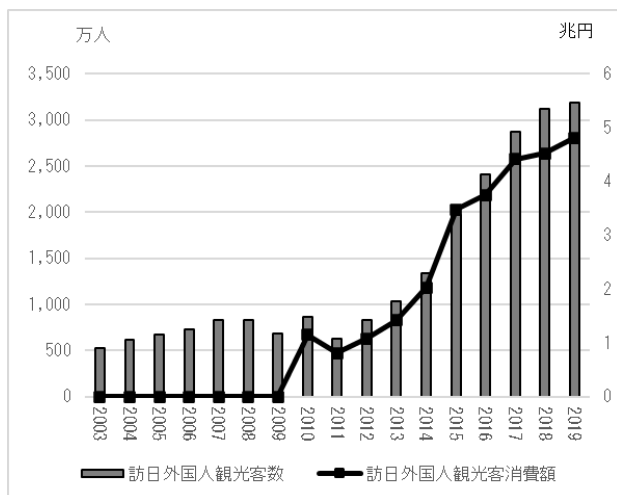


図2 訪日外国人の動向 訪日外国人消費動向調査より作成

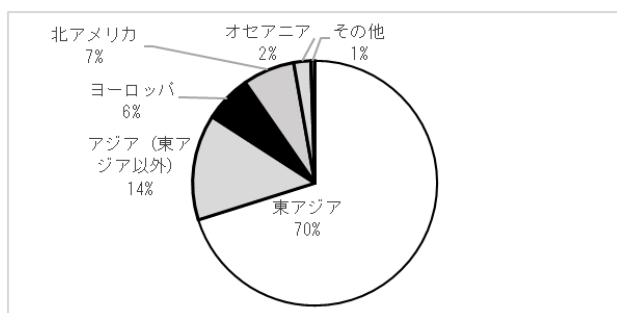


図3 2019年訪日外国人内訳 訪日外国人消費動向調査より作成

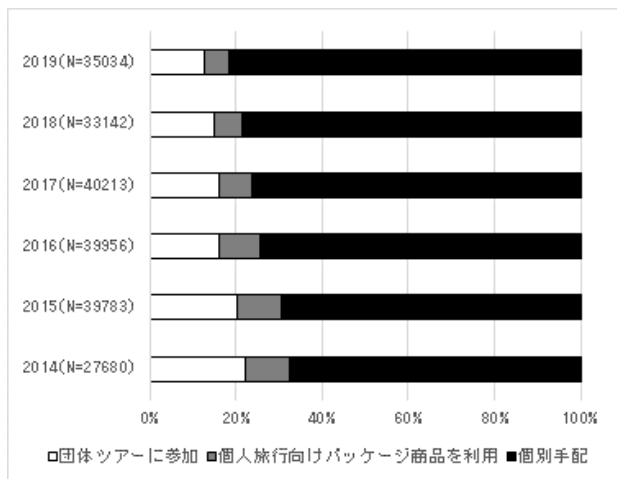


図4 旅行手配手段の推移 訪日外国人消費動向調査より作成

### 3. アジア人留学生の日本観光ニーズ

#### 3.1 アンケート調査の概要

アジア人留学生の日本で観光ニーズを把握することを目的として、質問紙調査を実施した。調査対象は中京圏にある私立文系A大学の学部ならびに大学院に在籍する留学生である。調査時期は2021年11月から2022年2月である。

質問項目は、日本で観光する際に期待すること、

日本で旅行する際の同行者、日本で観光する際の情報の入手先、日本で観光する際に便利なもの、に加えて性別・出身国や地域・日本滞在年数・在学年数・日本の旅行経験である。

#### 3.2 回答者の属性

調査の結果、8名の留学生から回答を得られた。出身国はネパール4名、ミャンマー2名、ベトナム1名、台湾1名であった。性別は男性2名、女性6名であった。

日本に来てからの年数は3年から7年(平均5.1年)であり、大学・大学院入学後の年数は2年から5年(平均2.9年)であった。

回答者8名全員が、日本での観光のための旅行経験を有していた。

#### 3.3 日本での観光ニーズ

旅行の際の希望する同行者は友人・知人が4名、家族が3名、パートナー・恋人が1名であった。

日本で観光する際に期待することについて複数選択で尋ねた結果、日本食や自然・風景鑑賞のニーズが多く、温泉入浴のニーズはあまりみられなかった(図5)。大森(2019)の分類する欧米主要国と類似した結果となった。

続いて情報の入手先について単一選択で尋ねた結果、地域の観光協会のホームページや宿泊施設のホームページ、同じ国の知人や日本人の知人から聞いた話が選ばれていた(図6)。

続いて日本で観光するときにあると便利なものを複数選択で尋ねた結果、英語で書かれたホームページ、食事のメニュー、現地の観光案内、及び無料Wi-Fiが挙げられていた(図7)。

### 4. 長野県阿智村昼神温泉での現地調査

#### 4.1 昼神温泉の概要

昼神温泉は、長野県阿智村に所在する温泉地である。長野県南部に位置し、名古屋駅から1時間半程度と中京圏からのアクセスが良好な環境にある。2019年度の観光客数は約575,400人であり(阿智村, 2021)、近年緩やかに減少している。また、全国星空継続観察(スターウォッチング・ネットワーク)平成18年度夏期観察において、夜空の明るさが星の観測に適した場所の1位に「阿智村もみじ平天文村」が選ばれたことを契機に、阿智村内の昼神温泉近隣にある「ヘブンスそのはら」で星空ナイトツアーが

開催されるようになり、多数の観光客が訪れるようになってきている。

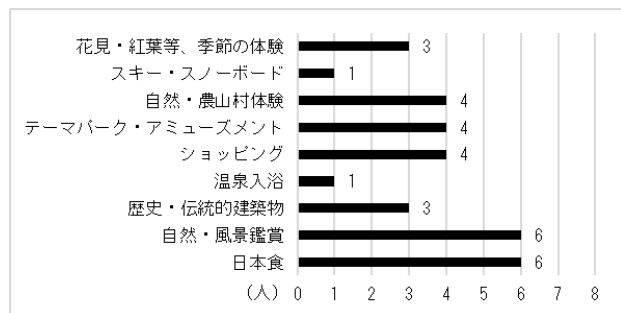


図5 日本での観光に期待すること



図6 情報の入手先

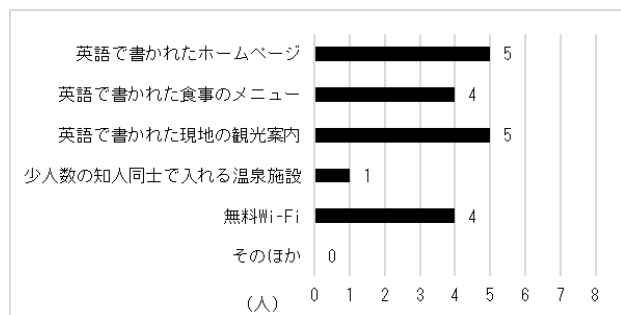


図7 観光するときにあると便利なもの

阿智村では、2006年昼神温泉にある旅館などを中心に、「昼神温泉エリアサポート（昼神温泉観光局）」が設立された。同社を発展させ2016年に「株式会社阿智村観光局」と名称を変更したのち、2017年11月には日本版DMO（地域観光づくり法人）の第1弾として地域DMOへの登録をおこなった。日本版DMOとは観光地域づくりをおこなうことについて多様な関係者の合意を形成し、データ分析から導き出される明確なコンセプトに基づき戦略を立て、事業を推進する組織である（観光庁、2015）。

地域DMOとなった「株式会社阿智村観光局」はインバウンド観光について、東アジア地域に加えて欧米地域のFIT（個人観光客）をターゲットとし、受け入れ体制を整備し、誘致を進めるとしている（阿智村観光局、2020）。阿智村に宿泊する外国人は増加しており、長野県の「外国人延宿泊者数調査調査」によると2019年には6,922人に外国人が宿泊している（図8）。また、その内訳をみると、8割以上がアジアから来ている（図9）。

#### 4.2 Web Site 調査

ネパール出身の留学生3名が、昼神温泉関係のWeb Siteを閲覧し、その評価をおこなった。まずWebサイトのわかりやすさを尋ねた結果、多くのホームページが「わかりやすい」との評価を得た（図10）。

続いてWeb Siteの情報をもとに、昼神温泉周辺の観光スポットへの関心度合いを5段階（5が最も高く、1が最も低い）で尋ねた。結果、「ヘブンスそのはら」で開催されている「日本一の星空ツアー」が最も人気が高く、朝市の人気は高くなかった（表1）。

#### 4.3 現地調査の調査結果

ネパール出身の留学生3名と日本人学生2名、引率教員2名で昼神温泉の現地調査をおこなった。まず阿智川の河原を散策し、昼神温泉内の飲食店で昼食をとった。その後、温泉での入浴を希望しなかった留学生3名は遊歩道と阿智神社周辺の散策をおこない、土産物屋に立ち寄った。入浴を希望した日本人学生2名は日帰り入浴施設で入浴をおこなった。

留学生からの感想で、良かった点としては「蕎麦を食べることができたこと」や「遊歩道沿いの景観、河原で遊べたこと」などの指摘があった。改善点としては「食事できる場所が少ない」、「食事のメニューに英語表記があるとよい」、「見知らぬ人と温泉に入る習慣がないので、個別に温泉に入浴できる設備があるとよい」といった意見が挙げられていた。

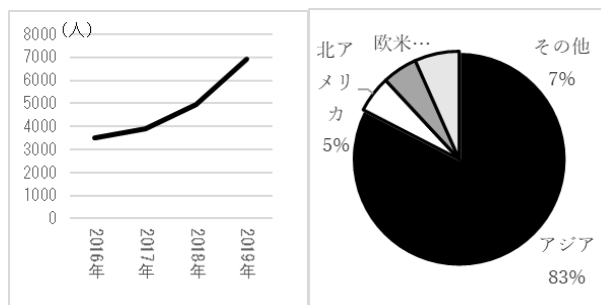


図8 阿智村外国人宿泊者数 図9 外国人宿泊者内訳

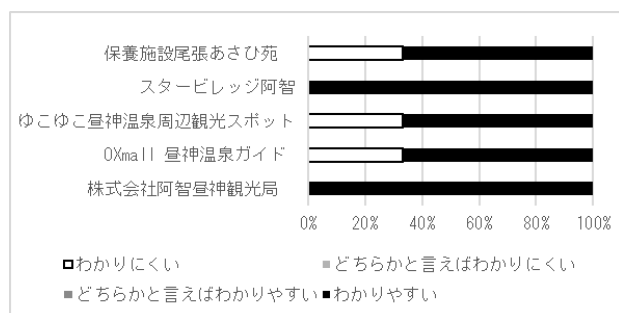


図 10 Web Site の評価 (N=3)

表 1 観光スポットへの関心度合い (人)

	1	2	3	4	5
日本一の星空ツアー			1		2
昼神温泉湯ったりーな(日帰り入浴施設)		2			1
昼神温泉ふれあいの湯(足湯)	1	1	1		
阿智神社			3		
昼神温泉朝市	2			1	

## 5. 徳島県三好市大歩危・祖谷温泉郷の事例調査

### 5.1 大歩危・祖谷温泉郷の概要

大歩危・祖谷温泉郷は、四国のほぼ中央、徳島県三好市に所在する温泉地である。大歩危には、吉野川が作り出す渓谷が存在し、遊覧船での川下りなどができる。大歩危・祖谷温泉郷は、2004年に「四国の秘境大歩危・祖谷神々の祭」など、秘境、すなわち、外部の人が訪れることの少なく、開発が進んでいない自然と昔ながらの生活が残る地域であることが地域の特色の一つとなっている。実際、祖谷温泉郷には祖谷温泉、新祖谷温泉などいくつかの温泉が存在し、山里に一軒宿が点在している。また、祖谷川にかかるシラクチカズラで作られた「かずら橋」(写真1)は観光名所として知られている。

この大歩危・祖谷温泉郷は、「旅して日本プロジェクト」が主催し、環境省・内閣府、総務省・経済産業省・観光庁が後援する「温泉総選挙」において、2016年インバウンド部門賞2位、2017年外国人おもてなし部門1位、2018年観光庁長官賞、外国人おもてなし部門1位、2019年、2020年外国人おもてなし部門2位にそれぞれ選出されている。大歩危・祖谷温泉郷は近年、インバウンド観光、訪日外国人観光客誘致で注目が集まっている地域である。

### 5.2 大歩危・祖谷温泉地域の取り組み

大歩危・祖谷温泉郷の訪日外国人観光客誘致の背

景には、「大歩危・祖谷いってみる会」の活動がある。「大歩危・祖谷いってみる会」は、ホテル祖谷温泉の経営者であった植田佳宏氏を中心に、大歩危・祖谷温泉地域の5つの宿泊施設が中心になって作られた団体である。同会では、宿泊施設一つ一つが集客活動をするのではなく、営業に行く際にパンフレットを5施設分持参しておいてもらう、ホームページやパンフレットの共同制作、合同イベントの開催など、共同して集客活動を行っているところに特徴がある。すなわち、各宿泊施設へ観光客誘致ではなく、地域への観光客誘致をすることで地域全体の振興を目指している。

徳島新聞(2018)に掲載された同会の資料によると、大歩危・祖谷温泉の外国人宿泊者数は、2007年に546人であったのが、2017年には18847人に増加している。2017年時点で、観光客に占める外国人の割合は25%になっている(徳島新聞, 2018)。国地域別の内訳をみると、香港53%、台湾11%、中国7%の順となっており、香港からの観光客が多いことに特徴がある。

なお、2022年3月現在、5つの旅館のうち3つの旅館で露天風呂付き客室が用意されている。また5つの旅館のうち4つWeb Siteで日本語に加えて、英語、中国語による案内がなされている。

### 5.3 インタビュー調査結果

2021年11月に、大歩危・祖谷温泉郷の現地視察を行い、「大歩危・祖谷いってみる会」の創設者であり、ホテル祖谷温泉の代表取締役社長である、植田佳宏氏と三好市観光協会の太田由美氏にインタビューをおこなった。

#### 5.3.1 太田氏へのインタビュー調査の結果

##### 1) 外国人観光客受け入れの工夫

定期観光バス(ボンネットバス)のガイドをしていた際、英語はできないので最初は集合時間だけ必死に伝えていた。その後徐々に外国人観光客が増えてきたので、バスの運営会社がガイド内容をテープに吹き込み、ボタンを押すと英語と日本語のガイドが流れるようになった。

旅行案内のパンフレットには、外国人観光客向けに英語と簡体字を併記するようにしている。

大歩危駅前の観光協会の事務所に、英語のわかる外国人の職員を置くようになった。宿泊施設でも海外からインターンシップを受け入れているため、従業員が簡単な英語ができるようになっている。

## 2) 温泉地への訪日外国人観光客誘致

旅館には繁忙期と閑散期がある。梅雨の時期、9月、12月から3月はお客さんが少ない。この時期に、海外から観光客が来ることで旅館の収益が安定する。例えば2月の春節に中国からの観光客が来る。

東洋文化研究者アレックス・カー氏の家がある。山間にある落合集落が、重要伝統的建築物保存地区に指定されており、その集落をアレックス・カー氏が古民家宿泊施設としてプロデュースした。その結果、アレックス・カー氏に関心のある外国人や、のんびりした田舎暮らしに関心のある外国人が、落合集落に来るようになった。

### 5.3.2 植田氏へのインタビュー調査の結果

#### 1) 「大歩危・祖谷いってみる会」の取り組み

ホテルの営業に行くときに、自分のところだけ儲かってはよくないと考え、自分の会社のパンフレットを置くだけでなく、ほかのホテルのパンフレットも置いてもらうようするなど、地域一体となった営業活動を行った。地域の主要プレイヤーが連携して活動することで、観光客を呼び込むことができた。自分のホテルだけが儲かるのではなく、地域住民のための観光振興で、過疎対策の意味合いもある。

#### 2) 訪日外国人観光客誘致について

来日外国人観光客数は増加しているが、四国にはなかなか来てもらえていなかった。徳島県は都道府県別外国人宿泊者数でも順位が低かった。

大歩危祖谷温泉郷5つのホテルの外国人宿泊数が2007年に500人だったのが、2019年には20,000人になった。香港からの観光客が50%程度である。

小泉内閣時代に始まったビジット・ジャパン・キャンペーン以降に外国人観光客を意識し始めた。

外国人誘致のきっかけは、大歩危・祖谷温泉郷にアレックス・カー氏が住んでいたことにある。また、同地域がナショナルジオグラフィックの記事で紹介されたことやミシュラングリーンガイドの二つ星を獲得したことで、大歩危・祖谷温泉郷の魅力が海外にも紹介された。

#### 3) 出身国による特性

インバウンド観光で最初、アメリカやオーストラリアの観光客を誘致しようとしていたが上手くいかず、その後香港に焦点を当てた。マナーの良い層をターゲットにしている。

欧米の観光客とアジアの観光客では観光に求めるものが異なる。アジアの観光客は SNS、インスタ映

えなどを重視する。欧米の観光客は、その国の価値観を尊重する。わざわざ祖谷温泉まで来てくれる欧米人は、人工物が少ないような自然環境が大事。

## 6. 考察

本研究で取り上げた、阿智村昼神温泉ならびに大歩危・祖谷温泉郷ではどちらも外国人観光客誘致に積極的に取り組んでいた。また両地域も個別の旅館・ホテルの単独の取り組みではなく地域の旅館・ホテルほか観光関係機関が一体となって、地域振興を目的として外国人観光客の誘致に取り組んでいた。したがって、地域振興の手段として温泉地への外国人観光客誘致が期待されていることがうかがえた。訪日外国人消費動向調査では訪日外国人の温泉入浴への関心は高く、とりわけアジア主要国の訪日外国人にその傾向がみられることが指摘されてきた。しかし、本研究におけるアジア人留学生への調査の結果、温泉入浴についての観光ニーズはそれほど高くなかった。その理由として、アジア人留学生であっても、母国では親しくない人と一緒に入浴する習慣がないことが挙げられる。祖谷温泉では多くのホテルで露天風呂付き客室が用意されている。高所得者層に限定されるものの、親しくない人と別れて個別に入浴することが可能であることで、温泉入浴に関心のある層を取り込むことができていると推察される。

また、観光に当たり希望するものとして、英語で書かれたホームページ、現地の観光案内、食事メニューが要望されていた。また、大歩危・祖谷温泉郷では英語や繁体字による情報提供が進んでいた。したがって、英語を中心とした多言語による情報提供についてのニーズが多いことが示唆された。



写真1 かずら橋

## 謝辞

インタビューに協力いただいた、植田佳宏ホテル祖谷温泉代表取締役社長ならびに三好市観光協会太田由美氏に厚く御礼申し上げます。また、調査に協力してくれた留学生の皆さんに深謝します。

本研究は名古屋産業大学環境経営研究所の助成金を受けて実施された。

## 参考文献・資料

- 朝倉慎人. 2014. 生活空間への観光のまなざしと住民の対応—徳島県三好市東祖谷地域を事例として—. 人文地理. 66(1), 16-37.
- 阿智村. 2021. 阿智村の統計 2020.  
<https://www.vill.achi.lg.jp/soshiki/2/20210301muranotoukei.html> (2022年3月1日確認)
- 株式会社阿智村観光局. 2020. 観光地域づくり法人・確立計画.  
<https://www.mlit.go.jp/common/001211302.pdf> (2022年3月1日確認)
- 観光庁. 宿泊旅行統計調査 各年版.
- 観光庁. 訪日外国人消費動向調査 各年版.
- 観光庁. 2015. 観光地域づくり法人の登録制度に関するガイドライン.
- 長野県. 外国人延宿泊者数調査 各年版.
- 内閣府. 2018. インバウンド需要の取り込みに向けて. 内閣府. 地域経済 2018, 39-69.
- 大森寛文. 2019. インバウンド価値共創と推進課題: 東京多摩地域に外国人観光客を呼び込むために. 明星大学経営学研究紀要 (14), 59-78.
- 島宗俊郎, 伊藤雅一. 2017. 長野県阿智村のインバウンド着地型観光ニーズ. 名古屋産業大学論集 (30), 31-38.
- 徳島新聞. 外国人宿泊客が2年連続1万人超 徳島・大歩危祖谷 (2018年1月18日).  
<https://www.topics.or.jp/articles/-/15552> (2022年3月1日確認)